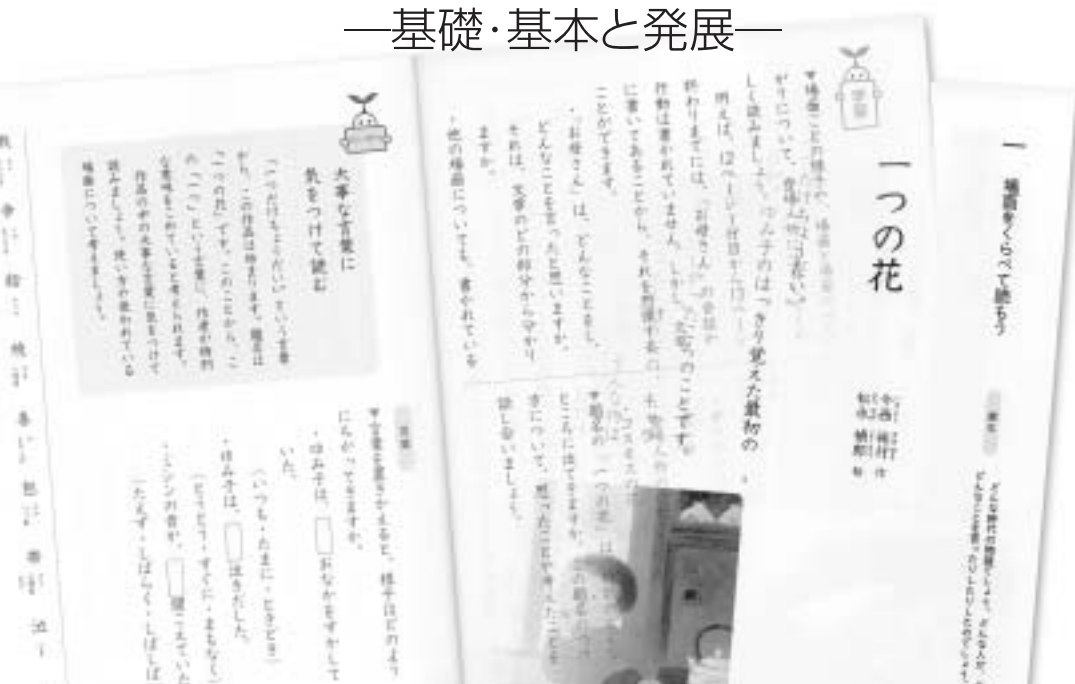


特集

平成17年度新版教科書Ⅳ

—基礎・基本と発展—



■ より使いやすく、言葉の力がしっかり身につく十七年度版教科書 ■

安藤 ● 十七年度版教科書は、一つの到達点を示すことができたのではないかとわたしは思います。特に今回、焦点を当てたのは、読みを重視したことだと思います。

西村 ● 確かに、十四年度版の特徴である、技能・能力の定義づけやリード文のよさをしっかりと踏まえ、よりわかりやすく編集されています。その結果として、ずいぶん使いやすくなりました。全体として、読みを重視した内容になっていますが、例えば、三年生の説明文「ありの行列」でいえば、そこで学んだ段落をとらえる力が、次の説明文にどうつながっていくのか、書くことにどうつながっているのか、というようなことが非常にわかりやすくていいと思います。

白石 ● 西村先生が指摘されたように、一つの教材で学んだことが、次の教材で生きるようにすることは本当に大切だとわたしは考えているんです。それは、まさに「生きて働く言葉の力」を育てることだと思えます。

す。例えば、上巻で文学を学んだらそこで培った力を、今度は、下巻の文学教材で生かして学習します。こうしてそれぞれの教材が関連し合うように編集されていることは、十七年度版教科書の大きな特徴です。

安藤 ● さらに、十七年度版教科書は、きちんと読むことに徹する教材と、読むことと書いて話したりする活動を合わせた教材との両方があります。それらをはっきり見えるようにしました。その点は、十七年度版は非常に明確になっています。それは、活動の部分を少しづつきりさせたからでしょうね。

白石 ● 新しい試みとして、言葉を題材にした単元を設けましたね。各学年の下巻に位置づけられていて、系列化されています。

西村 ● 言葉単元は、国語という教科でしかできない学習を、国語らしく学習するというねらいで設けたのですが、非常によかったと思います。

十七年度版教科書を、「基礎・基本と発展」という観点からこれらの教材がどのように系統立てられているかを調べてみました。上巻

座談会

「基礎・基本」がわかり、 しっかり身につく 17年度版教科書

西村 佐二

(にしむら すけじ)
聖徳大学教授



白石 範孝

(しらishi のりたか)
筑波大学附属小学校教諭



安藤 修平

(あんどう しゅうへい)
前富山大学教授



はある意味では学習の構えを作り、基礎・基本を徹底させる。下巻では、子どもたちの自由な発想をできるだけ生かして学習するといふように、教材がうまく配列されています。十四年度版の基本的な考え方を踏まえ、より使いやすくなつた十七年度版といえるでしょうね。

■「基礎・基本」が学習者にも指導者にも見える教科書■

安藤 ● 国語科の学習は、まず言葉の力をつけることだと思ふんです。いわば「基礎・基本」は、子どもたちに必要な国語の力をつけていくことにあります。十七年度版教科書では、十四年度版に引き続いて、そうした基礎・基本の考え方を教科書でさらに明確に出していきたくたんです。具体的には、十四年度版で形を作つた「単元冒頭」「学習ページ」「学習の窓」の三段階での主張をより完成させていきたいと思ひました。十四年度版は、「学習の窓」の数が少なかつたり表現が十分でなかつたりと、改善の余

西村 ● そのことは、十四年度版教科書を作る段階からかなり議論しましたからね。「基礎・基本」を定義づけることを大切にすることは、現場の先生方にはいい印象を与えることができるようになっていふつですね。

白石 ● 以前の教科書は、教材をこんなふうに見てみましよう、という単元名がついていただけでした。十七年度版では、この教材では「この言葉の力がつくんだよ」、「こうした読む方法、あるいはこんな読む技術が身につくんだよ」というとらえ方がきつちりとしていふようになっていふつですね。

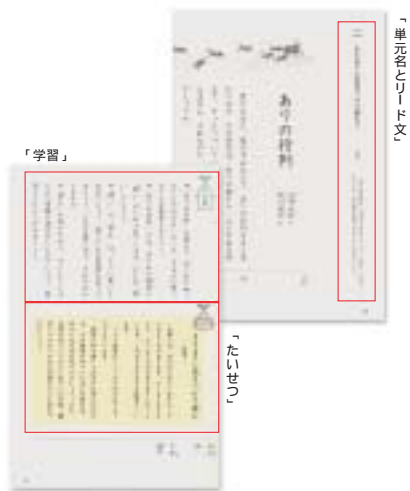
安藤 ● 各単元冒頭では、単元名といふしにリード文が載つていますが、これは単元に入るときに、学習者の構えを作ると同時に、指導者の心構えをも示唆していふといふですね。

白石 ● わたしは、「基礎・基本」は学習の方法や技術を身につけることだと考えていふんです。そして、それらを駆使できる子どもたちを育てることが大切だと思ひます。そのように考えると、この「たいせつ」と

地がありましたから。

白石 ● 確かに、十七年度版では、「単元名とリード文」「学習」「たいせつ」という三つから「基礎・基本」をわかりやすい形でまとめることができたのではないかな、と思ひます。実際の現場の先生方が指導をしていく際に非常に助かつたのは、この部分だと聞きます。これらの部分は、学習のねらいを明確にして、「基礎・基本」を主張していふつですね。

先生方のこつとした声を踏まえ、ここでの学習の何が基礎・基本なのか、といふことが、よりわかりやすくなつていふつと思ひます。



17年度版「国語」三上「ありの行列」

いふ部分がそれぞれの教材の目的を見事に表してくれたのではないかな、と思ふつですね。

安藤 ● 教科書編集は一つの主張ですから、お使いいただく先生方にしっかりとその編集の趣旨をお伝えしなければいけません。「単元名とリード文」「学習」「たいせつ」で具体的にこの単元や教材ではこつという学習をします、しかも基礎・基本はこつです、また、活動する場合はその手順がわかりやすく示されています、と示すことが光村の教科書の主張である、と思ひますね。

■この単元で何を指導するのかを明確にする■

安藤 ● 「基礎・基本」の徹底は、学習指導要領の要請といふこともありますが、本来、それは当たり前のことです。しかし、教科書ではそれがなかなか見えにくかつたんですね。結果として、学習活動が中心になつてくると、「基礎・基本」の力をしっかりと子どもたちにつけることができないのではな

いか、という現場の先生方のいわば迷いの声がありました。そこで、十四年度版ではそれを取り除くために、「学習の窓」では、大事なところはこうです、ということを示すことに努めました。「学習のページ」は、練習に練ってこれだけというものを厳選しました。

白石 ●「基礎・基本」が教科書でこのようにしっかりと定義づけられているのですから、授業では国語の力としてもっと定着していかなければなりません。ところが、例えば物語でいえば、場面に分けて登場人物の気持ちをずっと追っていき、最後にこの作品はこういうことですよ、と終わってしまう場合がまだまだあります。

安藤 ●それはきつと、今の現場が抱えている大きな問題なのだと思います。学び方や「基礎・基本」が大事だといっても、学び方や技術に直結していく考え方がまだ弱いのではないのかな、と思います。

西村 ●今の指摘は、「基礎・基本」をどうとらえるか、という問題にかかわってくるの

が。

西村 ●やはり、徹底した教材研究とこの単元で何を指導するのか、ということを明確にするしかないんだと思います。例えば、この単元で学習した「基礎・基本」の内容を教室の掲示板に貼ったり、学習の仕方も日記文の書き方はこうなんですよ、と言葉巧みに子どもたちを誘い、黒板に貼ることを繰り返していく、というようなことをしている先生もおられます。そんな十四年度版での様子を見ると、十七年度版教科書でも、そうした光景を見ることができたらなおうれしいですね。

■「基礎・基本」を助ける活動■

白石 ●活動という視点で見ると、今までは、この活動をすればいいという感じでした。例えば、先生が子どもたちに紙を配って新聞を作らせるといふような授業が多かったのです。その点では、新聞作りなどその活動の手順が明確になったことは、現場の先生方に好評で、非常によかったと思います



でしょうね。読んだり書いたりする単一の技能を基礎として考え、教科書に載っているようなまとまった文章の読み書きを基本と考えていますが、学び方や意欲も「基礎・基本」に入れなくてはいけないだろうと思います。そういう意味では、単元冒頭にあるリード文の部分が指導者の構えにつながっていくのではないかと、と思います。

白石 ●先生方は、削減された時間の中で、いかに効果的に授業を進めていくかと考えたときに初めて、「たいせつ」など「基礎・基本」を押さえるために教科書で工夫した部分に目がいくようですね。ただ、そうしたことはまだなかなか難しいのでしょうか。研究校などの限られた学校なのが残念です。

ね。十七年度版教科書でも、この点は大切にしました。

安藤 ●活動の「基礎・基本」は非常に丁寧に作りましたからね。特に、その手順を。



17年度版「国語」四上「新聞記者になろう」

白石 ● 先生方が教科書に載っている手順を指導していけば、子どもたちはある程度、整った新聞が書けるようになる。そのレベルに子どもたちの書く力をもってこられるわけです。つまり、「活動あつて学びなし」ではなく、「活動を通してこの力がつくんだ」ということが、より明確にされたのではないかな、という気がするんです。

安藤 ● 教師ではなくて、子どもたちが教科書を見れば活動の手順がわかるというように作ろうとしましたからね。だから逆にページが増えちゃった（笑）。

十四年度版教科書は、学習指導要領の要請で「活動」が入ってきたわけですが、そのなかで「基礎・基本」がしっかりと見えてきたように思います。そのことで、「活動」が決して本道ではなく、いわば助けなんだ、ということがだんだん明らかになってきたのではないでしようか。

白石 ● 例えば、「大きなかぶ」（一年）でいえば、大きなかぶはこれしかないというように、グループで役割分担して、動作化の

た単元の両方でそのことをしつかり意識していただけるようにしています。

白石 ● 「スイミー」（二年）で、紙芝居を作って発表会をする授業があつたんです。そのなかで、ある先生は、必要な読みの力と活動する力は、こんな具合に関連があるようにしていました。紙芝居を作るためにはいくつかの場面に分けなければいけない。その場面を分ける方法としては、時間的な流れで分ける方法があるし、場所で分けることもできるんだ。さらに、人物の行動や事件でも分けることができるんだ、と教えたから、子どもたちからさまざまな場面の紙芝居やペープサートが出てきたんです。そういう読みと活動が一体となった学習を展開しているケースもあるんですね。

安藤 ● 白石先生が紹介されたように、先生方がその単元でねらうものにきちんと向かつていかなければ、どんなによい教科書を作ったとしても、授業は流れてしまうのではないかと感じます。ねらいに応じて時間をきちつと守りながら、大事なものは拾い、



発表会をする授業がありました。そこで、わたしは思つたんです。「大きなかぶ」の学習のねらいは、動作化をしてその発表会をすることなのだろうか、と。実は決してそうではないはずなんです。

西村 ● この単元で何を主張するのかを明らかにすれば、授業はそんなところに流れていかないと思いますけどね。何か活動をしなくてはいけないというような風潮になっているのが気になります。それと、国語の表現・理解という領域構成が、話すこと・聞くこと、書くこと、読むこと、という形になったことも、もしかしたら関係しているのかな、という思いがします。総合的な学習の時間の影響もおそらくあるでしょう。

安藤 ● やはり、活動というものを、適切な方法と場で、子どもたちの読みの偏りやつまづきをとらえていく大事な活動としてとらえてほしいんですね。もともとは活動という意味は、本文を読み深めていくための手段であつたはずですね。十七年度版では、読むことだけの単元と、活動を組み合わせ

そうでないものは大胆に捨てていく。そんな姿勢で十七年度版教科書を使つていただきたいんですね。

■「言葉の森」は「言葉」というキーワードでくくれる発展教材 ■

白石 ● 十七年度版教科書の巻末に入つた資料「言葉の森」は大成功ではないかな、という思いをわたしはもっています。これは、現場にたいへんな安心感を与えるのではないかなという気がするんです。やはり、「発展的な学習」について、現場の先生方は悩んでいます。国語はどうなるのか、算数や理科とどう違うのか、そういったことが見えないうからですね。

西村 ● その点では、わたしたちは「言葉の森」を発展としてとらえています、とこの教科書で光村の考えを示したことは、とてもいいと思いますね。

白石 ● わたしは「発展と補充」という考え方がいいのかな、と考えているんです。物語教材を読んで学んだことをさらに発展さ



17年度版「国語」四下「言葉の森」

「補つ」ということではないでしょうか。
白石●実際には、指導書で「言葉の森」の一つ一つの教材について、それぞれ複数の扱い方を示しているかと思うんです。例えば、ある単元と関連づけた扱いを一、二時間程度で教える例や、全員で取り組んだり、他の教材と差し替えて扱ったりする例、それから、夏休みに個人が取り組む例も出せるというですね。「本を紹介しよう」という活動では、自分で好きな本を探すことができない子どもに、ここに載っている作品が使えるよ、と示すこともできます。

せたい。この力をもう少し深めたい、確かにしたいというときに、「言葉の森」はとても使い勝手がいいのではないかと、思うんです。ただそこで一つ、この教材を一部の子どもだけに与えるのか、という問題があると思います。実際には、それはなかなかできないことでしょう。やはり、先生の心理からすると、クラス全員の子どもたちに取り組ませたいですから。とすると、教材はたくさん載っているでも使えない。たとえば、載っているやりきれないんです。
西村●わたしはもう少し違う角度から「発展」について考えたいと思っています。やはり、子どもたちはみなそれぞれ能力や達成度が違うわけですから、そうした実情に応じた形は必要でしょう。例えば、「新聞記者になるう」(四年)という教材であれば、すばらしい新聞を作る子どもがいる一方で、取材ができない子どももいるわけです。この部分だけを中心と考えて、それ以上のことを発展と考えるということもありうるのかもしれませんが。十四年度版「ツバメが



すむ町」(四年)で、フィールドワークに行つて調査したことが、総合的な学習の時間で生きてくる例がいくつかあったのです。こうして考えると、他教科にどう発展させるかということも発展の一つではないのかな、と思います。

安藤●現場の先生方から「発展」について聞かれたとき、整理して伝えないと意図したことが伝わらないようです。まず、現場でいう「発展」とは、各教材の後にあるものだと認識されています。例えば、教材文と同一作者の作品を読んだり、同じテーマの作品を読んだりというような例です。ところが、今回新しく教科書に登場する「発展的な学習内容」に当たる部分は、他の教材よりはやや難しい内容で、いわば教科書の中で子どもたちの世界を少し広げていくものだといえると思うんです。もちろん先生方はクラス全員で取り組んで構わないのですが、やはり普通の指導ではないのだ、ととらえていただければいいと思います。つまり、一つは「広げる」であり、一つは

安藤●「言葉の森」は、内容的には子どもたちの世界を広げようということがねらいです。小学校の教科書では今まであまりなかったけれども、こういう世界もありますよ、ということなんです。だから、先生方はとりあえず全員で取り組んでみてください。そのとき、子どもによつては、もっと別の本があるよと言ってあげる子もいるし、読むだけでいいよという子がいてもいいのだと思いますね。

白石●「言葉」というキーワードでくれる内容が入っているところがわかりやすいと思います。四年生なんかは、これくらいだったらとても楽しいはずですよ。

西村●「言葉の森」を掲載したことが、わたしたちの発展に対しての一つの考えだといえます。これからわたしたち自身が国語教師として、国語としての発展、能力的な発展、それから他教科に発展という部分も視野に入れて、さらによりよき教科書を作っていくことが本筋に大切だと思います。